



Title	雲南省西双版纳傣族自治州におけるプランテーション
Author(s)	石田, 知也
Citation	GLOBALブックレット. 2013, 11, p. 45-54
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48360
rights	
Note	

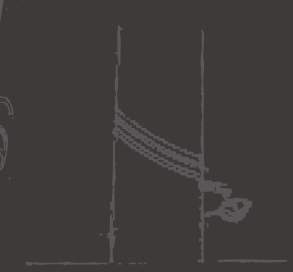
The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

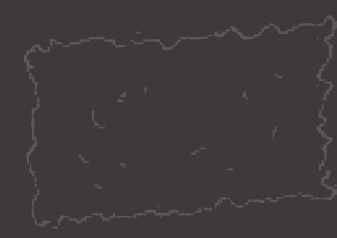
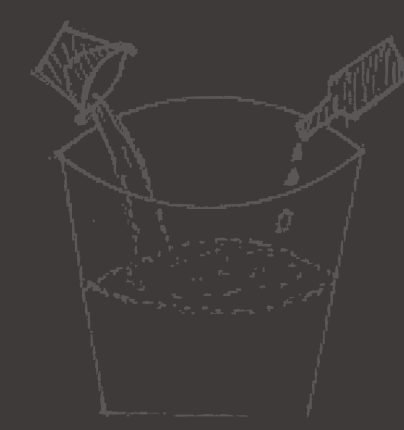
The University of Osaka

中国
共产党
镇
酒
嘎
市
洪

纳
板
村



【第1部】
西双版纳



雲南省西双版纳傣族自治州 におけるプランテーション

石田知也 大阪大学大学院国際公共政策研究科博士前期課程

1. はじめに

本稿では、西双版纳を対象地とし、単一的なプランテーションが当該地域に与えてきた影響と、それが抱える将来的なリスクについて考察する。

雲南省は、熱帯および亜熱帯気候に属し、生物多様性と美しい景観を誇る地域である。当該地域に暮らす少数民族は、これらの環境・生態資源を基に、固有の伝統文化を育んできた。栗原(2011)は、雲南の少数民族の特色として、その生活様式及び生活文化の多様性を指摘し、「それぞれの民族集団は異なる生態空間ごとに、生業・経済生活を営み、多様な生活文化を作り出している」と表現した(栗原 2011: 145)。

本稿の調査地である西双版纳も例にもれず、森林に代表される生態空間に基づいて、生活文化を築いてきた。しかし、この森林が過去半世紀にわたり、減少し続けている。郭(1997)によれば、その原因としては以下の3つが考えられるという。すなわち、「一つめは人口増加(大量の漢族の移民及び当地域に住む少数民族の自然増)につれて耕地拡大の要求も増えたこと、二つめは政府によるゴムなどのプランテーションの導入、三つめは燃料用の薪の伐採(生活用及び工業用)」である(郭 1997)。

以下では、このうちプランテーションについて取り上げ、考察する。この問題は、雲南省の豊かな文化生態の喪失を懸念する多数の学者及び政策当局者の注目を集めており、2009年には、Science誌において特集記事が組まれたほどである。こうしたプランテーションの拡大が、耳目を集めるのは、以下に挙げる三つの問題をもたらすためだと考えられる(図1)。

第一に、生態学的な問題である。雲南省昆明生態学研究所の

生物学者による報告によれば、「西双版纳は中国全土の面積のうち0.2%を占めるにすぎないが、そこには、中国の高等植物の25%、鳥類の36%、哺乳類の22%が生息している」という (Science 2009: p.565)。また、雲南省固有の生物種も多くみられることから、その生態学的な価値は計り知れないといえる。プランテーション拡大に伴う熱帯森林の減少によって、雲南省の生物多様性が脅かされることは、中国のみならず、人類にとっても大きな損失となりうる。また、本書の朱倩沁「ゴム農園と水質汚染」で述べるように、水の問題も懸念される。プランテーションでゴムの凝固剤・脱水剤として日常的に用いられる酸性物質は、適切に処理されていない可能性があり、近隣地域の飲料水や、ひいてはメコン流域の汚染を引き起こす懸念がある。

第二に、経済的な問題が挙げられる。過去において、少数民族は、自給的な農家が大半であった。しかし、現在では、多くのプランテーション所有者は、自給のための田畑を持たず、商品作物による現金収入を生活基盤としている。この様相は、天候による不作やプランテーション作物の市場価格に対して、非常に脆弱であるといえよう。これらの問題に関しては、本稿で後述する。

第三に、文化的な問題がある。先述したように、雲南省の少数民族は、地域特有の生態空間に調和した照葉樹林文化を創出してきた。しかしながら、森林減少による生態学的な変容、また生業そのものを置換するプランテーション経済によって、その文化は危機的な状況に瀕している。また、プランテーションを営むこと自体も、農家の生活様式を変え得る¹。加えて、プランテーションが文化に与える影響は、その他の要因とも複雑かつ相互に作用していることから、全容を把握することは非常に困難であり、一度文化が失われ始めると、それを食い止める事は不可能に近い。これらの観点は、本書「納板保護区における人々の生活の変化について——観察・聞き取りからの一考察」(西)と「アイデ

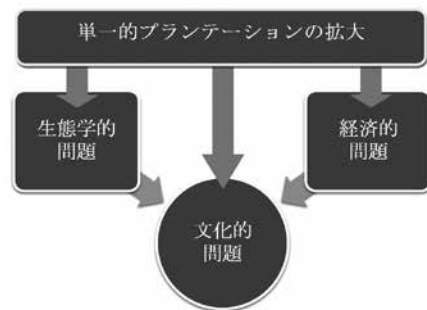


図1: 単一的プランテーションがもたらす問題

ンティティ」(小田)においても、アイデンティティや伝統知識の継承といった視点から描かれる。

以上の問題意識に基づいて、本稿では、西双版纳における単一的プランテーションについて、その現状を明らかにするとともに、在るべき姿について検討・提案することを目的とする。続く2章では、ゴムプランテーションの変遷と現況について、先行研究の整理及びの聞き取り調査の結果から述べる。3章では、現況から浮き彫りになるリスクについて考察する。最後に4章では、本稿が考える提言について検証する。

2. 雲南省におけるゴムプランテーションの変遷と現況²

2.1 雲南省におけるゴムプランテーションの変遷

本節では、文献調査を基に、雲南省におけるゴムの歴史を概観する。

深尾(2004)によれば、「西双版纳でゴムの試験栽培に成功したのは、1948年タイ華僑が約2万株の苗をビルマから陸路で輸送し、農民に委嘱して300畝(ム)あまりの土地にゴムを植えたのが最初である」(深尾 2004)。その後、1949年以降、華僑のタイ帰国に伴い一時は頓挫するが、1956年、政府の主導によって初の国営ゴム農場が成立される。以降、「1950年から1960年代においては、中国人民解放军が豊かな森林地域をゴム生産地へと変えていった」(Science 2009: 565)。文化大革命が始まると、北京、上海、重慶、昆明など各地からの下放青年で、西双版纳の農場人口は膨れ上がり、1965年の2万5000人から10年後の76年には8万8000人にまで増加する(深尾 2004)。これは、中国の経済改革によって、教育を受けた青年が故郷である農村へと帰還する動きとも連関していたと考えられる。続く、80年代では、「農場周辺の少数民族の村落が『民営ゴム』生産を始め」る(深尾 2004)。こうした一連の流れにより、西双版纳は、山地の60%を占めていた森林を、90年代には30%以下にまで減少させてしまう(郭 1997)。納板自然保護区の説明によると、以降も、根本的な回復は見られないまま、原生林の減少は続いている(王東昇 2010)。

1 なお、プランテーションが文化に与える影響は、一律的なものとは限らない。例えば、ゴムプランテーションが与える影響は、当然、ゴムの栽培に適する標高500-1000メートルに暮らす傣族において顕著である。

2 この節は、深尾(2004)、Science(2009)に基づく。

2.2 調査地におけるゴムプランテーションの現況

対象地におけるゴムプランテーションの現況を聞き取り調査した。以下に、その結果をまとめる。

2.2.1 主な事象について

図2に、調査地におけるゴム栽培の主な事象を時系列順にまとめた。前述したように、西双版纳では1947年にゴムの栽培が

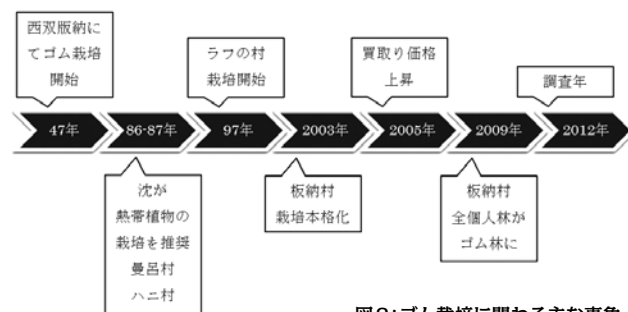


図2: ゴム栽培に関わる主な事象

開始された。聞き取り調査によると、86年頃に、鎮政府がゴム、バナナ、コーヒーといった換金性の高い熱帯植物の栽培を奨励するようになり、これに伴い、曼呂村を始めとするいくつかの村々がゴムノキの栽培を開始した。

以降、徐々に栽培地域が拡大していったものと推察される。近年においても、ゴム買い取り価格の上昇に伴い、ゴム栽培を始める農家は依然増加傾向にある。実際、2005年のゴム買い取り価格の高騰を経て、43世帯188人が暮らす納板村では、2009年までに個人が所有する全ての森林がゴム林へと転換された³。

2.2.2 栽培方法

まず、栽培条件について述べる。自然保護区管理員への聞き取り調査によると、調査地域付近においては、標高800～900メー

トル付近が、ゴムノキの栽培限界であるらしい。これより標高が上になると、越冬に必要な平均気温が確保できず、ゴムノキが枯死してしまう可能性が高まるようだ⁴。しかしながら、この限界的な標高においても、ゴムノキを栽培することで、生計を立てている世帯は少なくないとのことであった。このようなゴム農家は、後述するように、気候変動に対して著しく脆弱であるといえる。

次に、栽培のサイクルについて述べる。同様に、自然保護区管理員への聞き取りによると、当該地域では、生育が早く3～5年でゴムが採れるようになる。以降、4～5年を1サイクルとして、ラテックス(ゴムの原料となる樹液)を採取する木を変えていき、およそ樹齢30年で生産量の落ちてきた木を伐採する、といった形式が一般のようである。

続いて、1年のサイクルについて述べる。潘丙村での聞き取り調査によると、3月から10月にかけてが、栽培の適期であるらしい。3～4月頃、気温20度以上の日が、3日間以上続くとゴムの採取を始め、以降10～12月頃、気温15度以下の日が、同じく3日間以上続くまで採取を続ける、といった周期で栽培が行われている。

最後に、1日のサイクルについて述べる。潘丙村での聞き取り調査によると、早朝3時から5～6時間ゴムの採取を行うらしい。これは、気温が低い方が、ラテックスの浸出時間が長いという理由に基づいている。その後、仮眠を取り、午後から下草刈りなどの整備を兼ねて、ゴム林の巡回を行う。このようなサイクルに合わせるため、ゴム栽培を始める前後では、農家の生活様式が大きく変化したとのことであった。

なお、各村ともこのようなサイクルや病虫害の予防・対処法等は、政府の農業普及プログラムや、国营農場から学んでいる。

2.2.3 ゴムにまつわる経済活動

いずれの村も、ゴム栽培を始めて以降、豊かになったと感じているとの答えが得られた。曼点村では、平均的なゴム農家は年収1万5000元(2012年現在:19万円程度、中国農村平均は6000～8000元)、高所得者は50万元を稼ぐという。また、潘

3 Yongneng et al.(2009)によれば、西双版纳のあるハニ族の村では、2002年のゴム価格急騰に伴い、ゴムからの一人当たり収入が1998年の75.8米ドルから2004年の451.4米ドルへと急増した。納板村においても、これに類する変化が見られたと推察される。

4 この標高は、白坂(2004)が1170メートル、深尾(2004)が1000メートルと推測した栽培上限と概ね一致する。

丙村での聞き取り調査によると、街で労働者として賃金を得るよりも、ゴム栽培を行う方が儲かるために、村の若者の大半が、ゴムプランテーションを継承し、今後も経営を担おうと考えているらしい。このように、ゴムプランテーションは調査地における生業となりつつあるようだ。

初期投資について、多くの農家は、ゴムプランテーションに参入する際、金融機関あるいは親戚などから借金をし、始めるそうだ。その後、ゴムの生産体制が整って以降に、返済していくようである。

販売方法については、多くの村では、仲介業者が村までゴムを買い取りに来るようだ。しかしながら、市街地に近い一部の村では、自身でバイクによって運んで売ることもあるとのことであった。こちらのほうが高値で売れる等のメリットがあるのかもしれない。なお、販売前にラテックスを酸によって、脱水・凝固させておく必要がある。このような物資も、仲介業者あるいは街から購入しているらしい(例えば、蟻酸 1kgにつき8元)。

こうして、得た現金収入の多くは、家財道具や家、車の質を上げるといった消費的な支出に使われており、貯蓄や投資に回す農家は見られなかった。

また、自身でゴムを栽培せずに、土地だけを貸すケースも確認できた。例えば、曼点村での聞き取りによると、ある農家は、ゴム600株を10年使用する権利を7200円で貸していると答えた。また、他の農家は、田畑1畝(ム)をゴム林の用地として、一年2200円で貸し出す相手を探しているとのことであった。更に、調査では会えなかったが、広西省のバナナ農家に、自身が保有する土地の全てを貸して、そこからの現金収入で暮らしている農家もいるらしい。なお、これらの土地は貸した後、どのように用いられても良いと考えられており、「ゴム林やバナナ畑をやめた後、すぐに水田に戻せる」という誤解も見られた(一般的に、ゴムノキやバナナの生育には多量の農薬や肥料が必要で、地力を損ねると考えられる)。

いずれの村においても、追加的な労働力が必要な場合は、出稼ぎ労働者を雇うとのことであった。

3. 想定されるリスク

本章では、調査地において懸念されるリスクについて考察する。以下では、雲南省というセミマクロ(あるいはメソ)的な観点、プランテーション農家というミクロ的な観点において、リスクについて、詳述していく。

3.1 セミマクロ的リスク

プランテーションは、雲南省、あるいは西双版纳という地域にどのような影響を与え得るだろうか。

第一に、先述したように生態学的なリスクである。プランテーション拡大に伴う熱帯森林の減少によって、生物多様性が脅かされる危険性がある。とりわけ、ゴムプランテーションは、作業効率を高めるために下草を焼いてしまい、全くの単一植生にしてしまう農家が多く、他の動植物の生息を妨げている。これは同時に、根が浅く保土力の低いゴムノキのみの土層が広がることになり、地滑りの可能性を高める。自然保護区管理員の、ゴム林とその近隣の森林では鳥の巣を見た事がない、という言葉は印象的であった。また、水に関しては、先ほど挙げた汚染の問題とともに、水源の涵養に対する懸念が挙げられる。根が浅いゴムノキは原生の植生に比べて保水能力が低く、水の貯蓄機能が劣るためである。本書「納板河流域国立自然保護区における人々と水利用」(宇都宮)において、本調査地において、人々の水に対する意識は概して高いとされるものの、調査地以外の地域、あるいは今後の動向如何によっては大きな問題となり得る。

続く第二に、農業的なリスクがある。ゴムからの収入があまりに莫大なために、栽培可能な農家の大半は、田畑の耕作をやめてしまう傾向にある。これは、地域の食糧保障にとって好ましくない状況であるといえる。

第三に、文化的なリスクである。本書「西双版纳について」(思沁夫)でも述べられるように、雲南省においては、標高によってそれぞれ居住する民族がすみ分けられており、ゴムの栽培に適する標高に暮らす傣族においては、そのリスクは顕著である。傣族は、水かけ祭りに見られるように古くから、稲作文化を作り上げてきた。しかし、この傣族である曼点村においても、耕作の放棄が散見される。プランテーションによって、低地に暮らす傣

族の豊かな文化は喪失の岐路に立たされているのかもしれない。

3.2 ミクロ的リスク

プランテーションによって、少数民族の農家あるいは農村において、どのようなリスクが生じるかを見て行く。

繰り返しになるが、ゴムプランテーションによって、農家は大きな収入を得、村全体としても豊かになっている。しかしながら、現況のプランテーションは、著しく大きい経済的リスクを抱えているといえる。

その理由は、外生的なショックに対する脆弱性である。外生的なショックとは、例えば、気候変動や病害虫の発生、ゴムの国際市場価格変動など、農家がそれらをいくばくもコントロールできない事象である。まず、気候変動について述べる。雲南省は、水の豊かな地域として知られているが、直近の数年、異常気象による干ばつが確認されるようになってきている。また、一般的に、気候変動の下においては、冬は寒く、夏は暑くというように気候が極端化する可能性が知られている。こうした異常気象や極端化した気候においては、単一植生であるプランテーションは非常に大きな被害が予想される。現時点でも、限界的な標高で栽培されているようなゴム林は、壊滅的な被害を受けることが推測される。また、病害虫については、単一植生が脆弱であることも周知の事実である。実際、広西チワン族自治区のバナナ農家が、2000年代後半の病気によって、莫大な被害を出し、その一部が雲南省において、バナナプランテーションを行っているという現状がある。更に、現状は十分な需要が見込まれているとはいえ、今後ゴムの国際市場が急激に変化しないとも限らない。このように、外生的なショックは、現行のプランテーション経営に著しいインパクトを与え得る。

加えて、これらのインパクトに対して、農家や村々が予防的手段を取っていないことが、その経済的リスクを加速度的に増すことになる。先述したように、農家はプランテーション経営から得た現金の多くを、消費的に支出している。あるいは、初期投資のために、借金すらしている世帯もある。その上、自給に必要な田畑も人に貸してしまっている。また、頼るべき村や親戚といった共同体も、同じ標高に住んでいれば、大抵の者がゴム栽培を行っており、セーフティネットとして機能しない状況にある。

以上のような背景から、プランテーション農家あるいは村々が抱える経済的リスクは大きいと判断できよう。

4. 結論・提言

今まで、西双版纳における単一的プランテーションについて、その現状を明らかにするとともに、当該地域が抱えるリスクについて見てきた。これらのリスクの大半は、多様であった生態や経済が、急速かつ広範囲において単一化されていくことによって生じている、といえる。本来、多彩であった生態空間が、あるいは農耕や狩猟など、少数民族全体的には多様であった経済活動が、単一のプランテーションに置き換わったことが要因であるといえる。ならば、その単一化された現状を多様化することはできないだろうか。ここからは、西双版纳におけるリスクを回避するために、いくつかの提言を行いたい。

第一に、アグロフォレストリー (agroforestry) の実践である。アグロフォレストリーとは、樹木を植栽し、その樹間で家畜や農作物を飼育及び栽培する複合的な農林業形式のことである。西双版纳における傣族の人々は、アグロフォレストリーを実践してきた経験がある。郭(1998)によれば、ある村では、1996年時点では、i) クスノキと茶園、ii) 熱帯林下での藍栽培、iii) 薪炭林としての鉄刀木と陸稻・大豆などのアグロフォレストリーが確認されている。調査地が異なるため、単純な比較はできないものの、今回の調査では、こうしたアグロフォレストリーは観察できなかった。ゴムプランテーションでこのアグロフォレストリーを行うと、ゴム採取の作業効率は落ちるものの、ひとつの土地に多様な植生や生態空間を創出することができるとともに、ゴムからの収入と家畜・作物からの利益という異なる収入源を得ることが期待できる。これによって、一定の生物多様性を担保するとともに、季節を問わず安定した収穫があげられ、気候変動や病害虫、価格暴落からの被害も最小限に抑えることができよう。なお、白坂(2004)によれば、ゴムノキとコーヒーや茶などの組み合わせが可能である。

第二に、天候インデックス保険の導入である。天候インデックス保険とは、農業従事者が抱える干ばつなどの天候リスクに対する保険であり、タイやエチオピアなどで試験的に導入されている。

西双版纳においても、家畜の生育不良に関する保険等は広く普及しており、供給さえ可能であれば、一定のニーズは見込めるものとする。

以上では、調査で得られた事実と本稿での考察に基づき、提言を行った。以って、何らかの示唆と変えられることを期待し、結びとしたい。

引用文献

郭艶春
1997a 「雲南タイ族の環境保全思想と技術—西双版纳の村から—」『東南アジア研究』35 巻3号、465-488頁。
1997b 「雲南の多民族村における森林利用と「森林創出」—保山の山腹地帯にいきづく集団林業とアグロフォレストリー栽培—」『東南アジア研究』36 巻3号、379-423頁。

栗原悟
2011 『雲南の多様な世界：歴史・民族・文化』大修館書店。

白坂 著
2004 「雲南の南部山地における伝統的農業とその変容」『地学雑誌』113 巻2号、273-282頁。

深尾葉子
2004 「ゴムが変えた盆地世界—雲南・西双版纳の漢族移民とその周辺—」『東南アジア研究』42 巻3号、294-327頁。

王東昇
2010 「納板自然保護区の自然資源の現状」楊雲など編『西双版纳：納板河流域国家級自然保護区・社区合作管理的理論与实践』中国農業大学出版社、52-69頁。

Mann, C. Charles & D'Alusio-Guerrieri, Josh
2009 “Addicted to Rubber”, *Science*, 325, 564-566.

Yongneng Fu, Harold Brookfield, Huijun Guo, Jin Chen, Aiguo Chen & Jingyun Cui
2009 “Smallholder rubber plantation expansion and its impact on local livelihoods, land use and agrobiodiversity, a case study from Daka, Xishuangbanna, southwestern China”, *International Journal of Sustainable Development & World Ecology*, 16: 1, 22-29.